

エキュミニズムに向かって

法王は10月30日にスウェーデンのルンドに行き、新教ルーテル派の聖職者であるムング・コーナン世界ルーテル教会長とアンティエ・ジャケレン大司教と会談した。このことについて法王は「我々の過去を清算する機会をイエスがあたえてくれた」のだと語った。さらに、相互の赦しと神なくしては何もできないということ述べ、互いに協力し合うことの重要性を訴え、「宗教改革は教会生活において、聖書が大事な支柱となった」と語った。

1517年10月31日、マルティン・ルターが、95カ条の誓文をウィッテンベルグの教会の扉に張りつけてから、ちょうど今日で500年が経つ。今までにプロテスタントとカソリックは、ヨーロッパを分断し流血事件に巻き込んだことはあったが、両者が話し合ったことはなかった。その後ローマ法王フランチェスコとルーテル派のコーナン会長は「キリストの前で、傷の全快を願い、信仰の名における憎悪と暴力を排除することを誓う」という共同声明に署名した。

火葬の是非について

世界的な傾向として、死者の埋葬に際し、火葬が増加しているようだ。カソリック信者が88%をしめるイタリアでは、50年程前にはほとんど土葬だったが、最近では火葬がだんだんと増えて来ている。カソリックの世界では、最後の審判があると信じられている。その際に魂は肉体を取り戻るとのことで、カソリックでは火葬にできないと思われていた。いや、今でも火葬はできないと思っている人は多い。しかし、調べてみると、カソリックでは、50年以上も前より火葬を容認していた。実際、1963年7月5日、Piam et constantem 信条にて、火葬はキリスト教信仰に反するものではないと規定している。その火葬の後の始末について、カソリックは最近ドキュメンタリーを使って、カソリック信者の火葬後の心得を説いている。それによると、「火葬は死者が望めばそれでよし。火葬にするからといって、キリスト教のドグマを否定するものではない。問題は火葬後の灰をいかに処分しているかということだ。死というものを私物化してはならない。キリスト教共同体は常に全死者の冥福を祈っている。それゆえに火葬後の灰は、家に保存するのではなく、教会とか墓地におくべきだ。灰を家族でわけたり、ネックレスのケースの一部に入れて持ち運んではならないし、自然界に散布してもいけないのだ。」という。2014年、イタリアの火葬件数は19.7%に増加している。

法王、各宗教の要人と共に

臨時の聖年が終わりを迎えるのを前にして、11月3日、法王フランチェスコは世界の各宗教の代表者をヴァチカンに招待し、特別聖年の標語としての「赦し」を訴えると共に、各宗教者が真剣に「対話」を模索することを要請した。各宗教の代表者、特にイタリアに居住している人が、ヴァチカンの諸宗教対話省を通して招待されたのだ。イタリアには、やはりユダヤ教徒やイスラム教徒も多く住んでいるので、出席者200名の大部分を占めていた。日本の宗教としては立正佼成会の人と天理教の大ローマ布教所長が出席した。法王は15分ぐらいイタリア語で話をして、その後50分ぐらい立ったまま、出席者全員200名を迎え、握手をし、言葉を交わした。そして、法王は出席者全員一人ひとりに自分の紋章を彫り込んだメダルを手渡していた。私はそのとき、79歳の法王の上々の健康状態を間近に眺めて安堵した次第だ。

新カーディナルの任命

臨時の「赦しの聖年」が終了する直前の2016年11月19日に新しいカーディナルが17名任命される運びとなっている。そのうち法王に選ばれる権利を持っている80歳以下が13人、そして、80歳以上が4人である。法王フランチェスコは、人々を驚かせることを楽しむ趣味を持っているようだ。

今年、88歳のエルネスト・シモーニ神父である。彼はアルバニア共産主義のエンバー・ホクサーの独裁政権下の時に、28年間牢獄で過ごし、拷問に堪え、強制労働に従事した。2014年にアルバニアを訪問した法王はシモーニ神父に会い、一部始終話を聞き、法王は涙を流し、神父を強く抱きしめた。今回このシモーニ神父はカーディナルの任命に驚き、ヴァチカンに電話をして、その真意を問い合わせた。事実と知り大変驚いたようだ。もちろんカソリック界も驚いた。今回9月20日、聖エジディオ共同体主催の「世界宗教者の平和の祈りの集い」にローマ法王も参加したが、その機会にシモーニ神父を招待した。世界の宗教代表者と食事を共にしたが、シモーニ神父を自分の横に座らせた。なお、この食事会には中田善亮天理教表統領も同席した。

法王フランチェスコは世界のあちこちより新カーディナルを選んだ。「教会は世界のものである」という観点による。法王に選ばれる資格のあるカーディナルは11カ国におよび、そのうち7カ国は今までにカーディナルを擁したことはなかった。日本からは、前法王ベネディクト16世の時代にも、現法王フランチェスコ時代になっても誰も選ばれていない。

一神父が地震は「神の罰」だと定義：それにヴァチカンは反発

10月30日イタリアのラジオ放送ラジオ・マリアで、ヨハネ・ガバルコリ神父は、8月24日から今日に続く一連のイタリア中部の地震は「神の罰」だと定義した。これは伝統的家族主義、結婚の秘儀を護るためと同時に同性婚に対する神の戒めであると述べたものだ。

これに対して、11月4日、ヴァチカンの國務長官代理アンジェロ・ベッチュ神父は地震の被害者たちに「ラジオ・マリアの宣言は信仰者に対する攻撃であり、無信仰者に対するスキャンダルである」と弁明し、反論した。

法王はアッシジへ

1986年10月27日、ヨハネ・パオロ2世は世界の宗教の代表者をイタリア・アッシジに招待し、互いに対話を通し、相手を理解し、互いに手を取り合っ、世界平和を確立することを固く誓い合ったのだ。これは「アッシジの精神」と呼ばれ、今でも対話の精神の基本とされている。それから丸30年が過ぎ、その精神を継承し平和を求める世界大会は、聖エジディオ共同体のもと、ヨーロッパの主な都市を回りながら、大会の趣旨を確認し「アッシジの精神」を引き継いできた。本年はその年より30年ということで、500人以上の宗教者、文化人が集まり、「アッシジの精神」を再確認した。法王フランチェスコも、カソリックの代表者ということで閉会式の壇上に座り、大会に対する思いを「平和は神の名である。テロを、暴力を、戦争を正当化するために神の名を使うものは神の道を歩んでいるのではない。」「宗教の名における戦争は、その宗教自身の戦争である。戦争の因は、権力の掌握であり、大金を持つことであり、兵器商人の欲である。」などと述べた。